

## 第12回オストラコーダ国際シンポジウム\*

(1994年 7 月26日～ 7 月30日 プラハ, チェコ共和国)

田吹亮一\*\*・神谷隆宏\*\*\*

本シンポジウムは国際古生物学協会 (IPA) に所属する国際オストラコーダ研究部会 (International Research Group of Ostracoda) (IRGO) の12回目の定期大会であり, チェコ共和国の首都, プラハにおいて J. Riha (Moravia 博物館) を長とする組織委員会によって開催された。

本会議は共通テーマ「オストラコーダと生層序」のもと, 1994年 7 月26日から30日まで, プラハ市内の Hotel Pyramida で開かれ, その前・中・後には 4 件のエキスカージョンと各種研究会が催された。参加者は25ヶ国106名で, 日本からは 6 名が参加した。その他, 学生 (16) や accompanying member (51) を加えると総勢は173名にのぼった。

今回のシンポジウムは社会主義体制が終焉して間もないチェコ共和国において, オストラコーダの研究者が少ないにもかかわらず, J. Riha をはじめとする若い研究者達を中心となってよく準備し, 一定の成功を収めたと言えよう。前回のオーストラリアと比べて, 学生を含む若手・中堅研究者の参加が少なかったのがさみしかった。そのこともあってか議論の応酬の少ない「静かなシンポジウム」であったとの印象が残った。

本シンポジウムは, チェコが生んだオストラコーダ研究の大御所故 Vladimir Pokorný 教授 (Charles University, Prague. 1922-1989) を記念する催しでもあった。以下に会議の主な内容を簡単に紹介する。

## シンポジウム

7 月26, 27, 29日の 3 日間にわたり10セッション53件の個人講演 (口頭発表) が行われた。セッ

ション全体のスケジュールは, 進化・生態などに続き, 古生代から現世まで時代順に進められた。日本人による講演は, 次の 6 件であった。

- (1) 神谷隆宏 (金沢大学)・塚越哲 (東京大学) 'When, where and how does the heterochronic speciation occur? A case of *Loxoconcha uranouchiensis* species group'
- (2) 阿部勝巳 (静岡大学)・J. Vannier (Universite Claude Bernard)・田原豊 (幕張西高校) 'Ecological meanings of bioluminescence in *Vargula hilgendorfii* (Müller, 1890)'
- (3) A. Elewa (El Minia University)・石崎国熙 (東北大学) 'Ostracoda from the El Shelkh Fadi-Ras Gharib Stretch, the Eastern desert, Egypt-with reference to distinguishing sedimentary environments'
- (4) 池谷仙之 (静岡大学)・岩崎泰顕 (熊本大学)・志村かん奈 (静岡大学) 'Ecology and speciation of the genus *Spinileberis* in the North Pacific'
- (5) 田吹亮一・野原朝秀 (琉球大学) 'Seasonal distribution of intertidal ostracodes on gravels from the moat of a coral reef of Sesoko Island, Ryukyu Islands, Japan'
- (6) 矢島道子 (東京成徳学園) 'Trachyleberis scabrocuneata from Aburatsubo Cove near Tokyo'

シンポジウム初日に16件の講演が行われた後, ホテルの大会議場において歓迎パーティが開かれ, 参加者がチェコ産のワインと食事を楽しむ傍ら, ステージでは簡単な演奏会が催された。その中で, イギリスのオストラコーダ研究者, D. Horne が飛び入りで見事なギター演奏を行い, 喝采を浴びるなどのハプニングもあった。

\*12th International Symposium on Ostracoda

\*\*Ryoichi Tabuki 琉球大学教育学部地学教室

\*\*\*Takahiro Kamiya 金沢大学理学部地学教室

2日目(7月27日)は計20件の発表があり、夜は morphometric workshop と Paleozoic ostracode meeting が開かれた。3日目(7月28日)はプラハ郊外の巡検が行われ、多くの参加があった。夜は freshwater Ostracoda と deep-sea Ostracoda に関する2つの workshops が開かれた。

4日目(7月29日)は、9件の口頭発表後、15件のポスターセッションが掲示された。各々5分以内で説明が行われたが、この中で、塚越哲・神谷隆宏は 'Heterochronic evolution on ostracod hingements' について発表した。ポスターセッション終了後、サンプルの交換会が行われた。その後、R. F. Maddocks (IRGO 副会長) が議長となり総会が開かれ、次の開催地としてロンドンを選定、さらに、新役員として、会長・R. L. Kaesler (The University of Kansas), 副会長・D. Keyser (Zoologisches Institut und Museum, Hamburg), 書記・D. Van Harten (Free University, Amsterdam) を選出した。また、オストラコーダ研究者の newsletter である「CYPRIS」の財政上の問題が話し合われ、E-mail で各地域の研究者の代表に「CYPRIS」を送り、地域毎に必要な部数をコピーして研究者に配布するなど、費用節約のためのアイディアが出されたが、ともかく編集責任者の E. Brouwers (U. S. Geological Survey, Denver) を中心に発行を維持していくことが確認された。また、長年にわたるオストラコーダ研究への貢献に対し、J. W. Neale (連合王国) と H. J. Oertli (フランス) の両氏が IRGO の名誉会員に推挙された。総会ではその他、各 working group の活動等が報告された。シンポジウム最終日(7月30日)には、プラハ市内の見学会の後、夕刻より会場近くのレストランにてパーティが開かれ、バンド演奏に耳を傾けながらの晩餐と語らいは夜遅くまで続いた。

### 野外巡検

4つの巡検が実施され、各々ガイドブックが発行された。

#### 1) Barrandien 地域の下部古生界

7月21日～7月24日

案内者: M. Kruta・L. Marek

参加者: 15名(日本からは池谷仙之・石崎国熙が参加)

#### 2) Barrandien 地域の下部古生界 7月28日

案内者: M. Kruta

参加者: ほぼ全員参加した

#### 3) Bohemia 白亜系盆地の後期白亜紀層および Parava 山脈のジュラ紀層

7月31日～8月3日

案内者: J. Adamovic

(日本からの参加者なし)

#### 4) Carpathian 前縁盆地と Vienna 盆地 (Moravia 地域) の新第三系

7月31日～8月3日

案内者: J. Zelenka・J. Riha

参加者: 20名(日本人からは池谷仙之・神谷隆宏・田吹亮一・矢島道子が参加)

### 国別参加者の内訳

連合王国 (18), ドイツ (17), フランス (10), アメリカ合衆国 (8), 日本 (6), チェコ共和国 (5), イタリア (4), ブラジル (4), スペイン (4), カナダ (3), スウェーデン (3), ポーランド (3), オランダ (3), ベルギー (3), オーストリア (2), ロシア (2), セルビア (2), チュニジア (2), アルゼンチン (1), オーストラリア (1), 中華人民共和国 (1), イスラエル (1), ルクセンブルク (1), メキシコ (1), ニューゼaland (1)

### おわりに

1963年のナポリに始まり、その後ほぼ3年ごとに開催、12回目を終えたオストラコーダ国際シンポジウム (ISO) であるが、今大会は将来のシンポジウムのありかたについて一考をうながすよい機会となったように思われる。参加者に学生と大御所は目立ったものの、第一線で活躍する欧米の若手・中堅層の参加が少なく、これが講演等に対する質疑応答をやや寂しくさせる一因となった。89年フランクフルトで第1回、続いて93年グラスゴーで第2回が開催されたヨーロッパ・オストラコーダ研究者会議 (European

Ostracodologist's Meeting) が盛況であったこともあり、オストラコーダ研究者の国際的な研究交流・情報交換の場として ISO が唯一のもでなくなってきたことを示している。共通テーマの形骸化も指摘され、今回のシンポジウムでは「オストラコーダと生層序」のセッションが組まれることなく終了してしまった。これらの問題点は、シンポジウムの開催地とも関連してくる。多数の研究者を輩出・現有する国々においてシンポジウムの開催がひとまず一巡し（既に二度開催した国もある）、今後は新鮮な野外巡検を伴う初開催地を望む声のある一方、そうした場合、多岐にわたるシンポジウムの研究・事務関連の世話が不十分となるとの意見もある。次回の第13回（1997年）開催地の決定は総会での票決にもちこまれ、ロンドン（連合王国）がサンクトペテルスブルグ（ロシア）を僅差で破った。ロンドン決定の背景には、イギリスの若手研究者を主体とした最近の発展的研究が新たなオストラコーダ研究の方向を示すのではないかという期待が、歴史的標本をはじめとするロシアの研究・フィールドへの興味を上回った、という感がある。今回のシンポジウムで最も野心的だったワークショップのひとつは Fresh-water ostracodes に関するものだった。"The

Evolutionary Ecology of Reproductive Modes in Non-Marine Ostracoda" というプロジェクトのもと、ヨーロッパの6つの水域研究所が協力し合い、それまでばらばらであった材料を共通の種類に統一し、その生物地理、個体群動態、行動、(分子) 遺伝などを分担して研究を進めているという報告であった。この中心にロンドンで活躍する研究者がいたことは次回開催地の支持を集めた要因のひとつであろう。シンポジウムを今後さらに盛り上げる試みとして、一般講演中心の形式を変え、特定のテーマに絞るとか、他の分野の研究者も交えた討論の場等の工夫が必要となろう。最善の方向を模索中ではあるが、現生・化石の研究者が一堂に会して最新の研究成果あるいは問題点を交換し合い、そこから新しい概念や研究分野が芽生えるという ISO のよき伝統は受け継ぎ、さらに現代流に発展させていこうということを参加者の多くが再確認したことは意義深かった。最終日のパーティの席上で多方面の議論があり、主催者側から日本のオストラコーダ研究者のアイデアがほしいとの強い要請があった。オストラコーダ研究の発展のため、日本は次回ロンドン大会を成功させるよう最大限の協力をしたいと答えたところである。